

# 觀音信仰の形成並にその流傳に關する一考察

成 田 俊 治

## 一

觀音に對する信仰は、インド、シナ、日本三國は勿論大乘佛教の弘まつた國は何れも行われ、又民間信仰として廣く社會に普及している。特に我國では、佛教傳來より信奉され、幾多の觀音像が作られ又巡禮、觀音講として民間にまで浸透し、今日なおその社會に生きた信仰として見られるのである。それと共にその研究も爲され、多くの著書が出版せられ、又研究成果が發表されてをり、その數は八、九十の多きに達している。しかしながら、その大半は信仰を中心とした、或は布教を主としたものであり、學的研究の成果を發表したものの意外に少ない事に氣付くのである。特に觀音信仰の信仰史と云う系統的、體系的な研究は殆んど無いと云つても過言ではない。ここにこの様な研究の必要性が痛感されるのである。この意味に於て私は既に日本に於ける觀音信仰の一端を發表しているが、<sup>③</sup>本稿に於ては、特に觀音菩薩思想の類型、及び我國觀音信仰の源流についてその研究の一端を述べたいと思う。

## 二

觀音菩薩に對する信仰が何時頃始まつたかは現在のところ明確な定説は出されていない様である。先ず常識的な考

えから行けば、元來觀音菩薩は大乗經典の中の諸處に現われているが、主として菩薩の功德を説き、その信仰を鼓吹したものは、云うまでもなく大乗經典中思想的內容の豊富な法華經の觀音普門品であるから、この觀音普門品が出てから觀音の信仰が行われる様になつたと思われる。しかしながら、若し觀音が民間の信仰に基づき、佛教者が佛教の中に之を取り入れたものとするならば、普門品の製作以前に既に幾分か民間に其の信仰があつたものと云わなければならぬ。龍樹の大智度論の中に、この法華經と殆んど同様と思われるものが引用されていると云われている所から見れば、既に龍樹以前に觀音信仰が、單なる民間の信仰としてか、或は宗派的な色彩を持つたものとしてか、何れにしても其の信仰のあつた事は推察出来る。龍樹の出世年代に關しては諸種の異説があつて確としたものを決めるわけにはいかないが、大體西曆二〇〇年前後であり、この事からインドに於ける觀音信仰の起源は遅くて西曆紀元から餘り遠くない時代に既に存していた事が推定される。この事について、加藤咄堂氏は法華經普門品にある呪咀還著の思想から、この思想が、本生譬喩或は戒律に關する無數の經典中に屢々見るもので、これは傳説、風習として古來のインドに多く存していたとし、又小乘薩婆多部の律である十誦律第二に還著を明らかに承認している事から、觀音信仰の起源は普門品製作以前としておられる。

次に造像の面から一應の規定を試みてみると、西紀四〇〇年代の始めに、インドを周遊した東晉法顯三藏の『歷遊天竺記傳』のマツラーの都會の記事に、

「諸比丘尼多供養阿難塔、以下阿難請世尊聽女人出家故、諸沙彌多供養羅云、阿毘曇師者、供養阿毘曇、律師者供養律、年々一供養、各自有日、摩訶衍人則供養般若波羅蜜、文殊師利、觀世音等」

と記されており、果して之等の供養が何時頃から始まつたかは明らかではないが、此地に造像の盛んとなつたのはカニシカ王以前であつたらしいから、恐らく觀音像も一〇〇年から二〇〇年位の間に製作せられるに至つたのではな

ろうかと思われる。

又玄奘の『西域記』についてみても、觀音像に關しては諸處に述べられている。即ち同書卷三烏伏那 (Udyana 西北境) 國の條下には、

「石窠堵波西渡大河、三四十里、至一精舍、中有阿縛盧枳低濕伐羅觀自在菩薩像、威靈潛被、神迹昭明、法俗相趨、供養無替」

と云い、同卷三迦濕彌羅國 (Kashmira 北インド) の條下にも

「伽藍南十四五里、有小伽藍、中有觀自在菩薩立像、其有斷食誓死爲期、願見菩薩者、即從像中、出妙色身」

と云い、又同卷八摩揭陀國 (中インド) の條にも

「毘羅釋迦伽藍、……中門當塗、有三精舍、……中精舍、像立像高三丈、左多羅菩薩像、右觀自在菩薩像、凡斯三像鑿石鑄成、威神肅然、冥鑒遠矣」

とあり、又同摩揭陀國、佛陀迦耶の金剛座を説いた後、之に次ぎ

「佛涅槃後、諸國君王、傳聞佛說金剛座量、遂以兩軀觀自在菩薩像、南北標界、東面而坐、聞諸耆舊曰、此菩薩像、身沒不見、佛法當盡、今南隅菩薩、沒過智臆矣」又

「菩提樹東有精舍、高百六七十尺。……外門左右各有龕室、左側觀自在菩薩像、右則慈氏菩薩像、白銀鑄成、高十餘尺」

等、觀音像について色々述べている。勿論玄奘は此等彫像の作者、或は其の年代については言及しておらないが、その地理的範圍から見れば、インドの西北境烏伏那、迦濕彌羅より、マツラーを経て、中インド摩揭陀に至り、更に南

インド補陀落山にまで互つてゐるから、殆んどインド全般に觀音信仰が盛んであつたと思われる。又美術史上、烏仗那、迦濕彌羅は所謂犍陀羅美術の盛んな所であり、中インド摩揭陀より以南は何れもグプタ彫像の影響を受けた處であり、インドに於ける觀音像は之等犍陀羅式、グプタ式の兩方の影響を受けてゐるものと推測出来るのである。

更に、佛教史の上から考察すれば、西北インド迦濕彌羅地方に大乘佛教の流布したのは世親以後のことであるから、西紀四〇〇年代を上らず、中央インドに佛・菩薩の像が製作せられたのは大體三〇〇年以後の事であるから、玄奘の述べてゐる諸像は大凡西紀三・四〇〇年から五〇〇年の頃に成つたものと考えられ、従つて此の時代に於ては觀音信仰も全インドを通じ盛んになつたものと見て差支えないと思うのである。

### 三

さて以上の様な觀音像の彫造、或はその供養等の觀音信仰が如何なる根據により經典によるのであろうか。即ち經律論の三藏の中には觀音菩薩は處々に見る事が出來、その數は六十餘卷にのぼると云われている。特に密部に屬してゐる經典は多く觀世音菩薩を説いており、又大乘經典の中にも屢々觀音思想が織り込まれてゐる。その中觀音信仰の根本的經典と云えば、普通、觀音經と云われる妙法蓮華經觀世音菩薩普門品であり、その他にも觀音信仰を特に説いてゐるものに、

大方廣佛華嚴經卷五十二 東晉、佛駄跋陀羅譯

大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經卷六 唐、般刺蜜帝共懷迪譯

大毘盧遮那成佛神變加持經第一 唐、輸波迦羅譯

大乘莊嚴寶王經 宋、天息災譯

觀無量壽經 宋、晝良那舍譯

悲華經 北涼、曇無讖譯

千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經 唐、伽梵達摩譯

觀世音菩薩得大勢菩薩授記經 劉宋、法勇譯

請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪經一卷 東晉、竺難提譯

十一面觀世音神呪經一卷 北周、耶舍崛多譯

不空絹索呪經一卷 隋、闍那崛多譯

陀羅尼雜集十卷 梁、宋詳

種々雜呪經一卷 北周、闍耶崛多譯

等がある。では之等の各經典に觀音思想がどの様に表現されているのであろうか。

まず法華經普門品を見るに、その要旨は觀世音の名を稱する事により七難消滅、三毒除去、二求兩願の事を述べ、その普門示現の救済の方便として三十三身十九說法を擧げて觀音の救済を述べているのである。今、觀音菩薩が七難を消滅せられるについて見るに、

「善男子、若し無量百千萬億の衆生有りて、諸々の苦惱を受けんにも、是觀世音菩薩を聞きて一心に名を稱せば、觀世音菩薩、即時に其音聲を觀じて皆解脱する事を得ん<sup>⑩</sup>」

として、火難、水難、風難、刑戮難、羅刹難、幽繫難、怨賊難から除滅されることが明らかにされている。又三毒については貪、瞋、癡の三つの煩惱が觀音を念ずる事によつて、その煩惱から遁れ得る事を説き、又觀音の此土の遊化についての方便として三十三身十九說法を説いているのである。

次に華嚴經を見るに、善財童子が南方の光明山に至つて、觀音菩薩に會見して菩薩の法門を學び、菩薩が童子のために觀音の弘誓を説かれている。即ち攝取一切衆生の弘誓の願を發し、諸々の恐怖から離れしめ、變化の身を顯わし、同類の身を現じて衆生を攝取するものであると云い、又首楞嚴經に於ては、觀世音菩薩は

「聞熏聞修金剛三昧無依の妙力を以て、諸々の十方三世六道の一切衆生のために悲仰を同じくするが故に、諸々の衆生をして我が身心に於て、十四種の無畏の功德を獲せしむ」<sup>④</sup>

として十四種の無畏の功德を擧げており、これも弘誓の思想を述べているもので、觀音菩薩の誓願を示すものであらう。

又觀無量壽經には、觀世音菩薩が淨土に住し、娑婆世界に出現して衆生を救済する事を述べられており、又觀音菩薩の大慈大悲の色相が説かれ、次に

「若し觀世音菩薩を觀ぜんと欲すること有らん者は常に是觀を作すべし、是觀を作す者は、諸禍に遇はず、業障を淨除し無數劫生死の罪を除かん、此の如き菩薩は但其名を聞くに無量の福を獲云云」<sup>⑤</sup>

其他、寶王經、悲華經に於ては、觀世音菩薩の本生譚とも云うべきものが説かれており、寶王經に於ては、釋尊がまだ菩薩である時商人となつて師子國に貿易に出かけ、途中災難に遇い、それを師子國の聖馬王が救い、その聖馬王が觀自在菩薩であつたと云い、又悲華經では、無諍念王の子に千子あり長を不眇、次を尼摩、三を主衆、四を能伽羅、五を無所長と云い、無諍念王は後の阿彌陀佛、第一不眇は觀音大士、第二尼摩王子は勢至菩薩であるとして觀世音菩薩を阿彌陀佛の第一子としている。又「我が有ゆる善根功德を菩提に回向し、若し衆生が諸の苦惱を受け、恐怖不安の状態にあつて如何ともする能はざる時、一度び我が名を呼び、我が名號を唱えたならば、吾は何處にあつても

天耳を以て聞き、天眼を以て見、夫等の苦惱を救済するであらう。若し一人として未だ其の苦を免れざるものがあるならば、吾は永遠に佛に成らぬであらう。」と其の誓願を立てている。現世に於ける一切の苦厄を除き、恐怖不安を去る事が觀音の慈悲心を示す衆生救済の誓願である。

かくの如く、觀音菩薩は彌陀の脇侍として、彌陀の衆生救済の聖業を補佐すると共に、それは又獨自の働きを示しているわけで、衆生の一切の災難を除き、あらゆる欲望を滿たし、無量の福を與えると云う觀音の性質が、インドを始めとして、シナ・日本と普遍化し多くの人々の信仰を得た所以であらう。

#### 四

以上信仰の起源そしてその經典について簡単に考察したのであるが、ではこうした各種經典に述べられている觀音菩薩思想を類型的に分類してみると、顯教に説くものと、密教に説くものとに分けられるのである。

さて顯教に説く觀音は

一、淨土教系（觀經・無量壽經所説）

二、華嚴系（大方廣佛華嚴經所説）

三、法華系（法華經普門品所説）

の三つに分類する事が出来る、ではその個々についてみるに、

一、淨土教系の場合、觀無量壽經、及び無量壽經に説く觀音で、此の觀音は「無量壽佛空中に住立し給ふ。觀世音大勢至是二大士左右に侍立し給ふ」<sup>⑤</sup>とある如く、無量壽佛の侍者として彼の極樂世界に在る事を説いており、又

「觀世音菩薩及び大勢至、一切の處に於て身同じ、衆生但首相を觀て是觀世音と知り、是大勢至と知る、此二菩薩阿彌陀佛を助けて普く一切を化す」<sup>⑩</sup>

とあつて、彌陀の攝取一切衆生と云う聖業を補佐する所にこの觀音の性質があるわけで、其他具體的な救済の方法等は述べておらず、又尊容に關しては詳細に述べており、身相に於ては佛と殆んど變りはなく、唯頂上の肉髻及び無見頂相だけが佛に及ばないと説いている。<sup>⑪</sup>之から見るに、ここに説く觀音は、獨立したものではなく、どこまでも彌陀の脇侍として、主に對する從でここから獨立して觀音信仰を取り出すことは出来ないが、彌陀信仰に附隨した所の觀音に對する信仰の存在は否定する事は出来ない。

二、華嚴系の場合、之は華嚴經入法界品に説く觀音で、この經典によると、先の阿彌陀佛との關係はなく觀音の弘誓を述べている。即ち攝取一切衆生の弘誓の願を起し、諸の恐怖から離れしめ、變化の身を顯わし、同類の身を現じて衆生を攝取することが述べられている。そしてこれから考えるならば、觀音は主尊として取扱われているものの様である。又その觀音の住處として舊華嚴では光明山とし、新華嚴では補陀落山としている。この光明山と補陀落山とは同一のもので、補陀落山が觀音の淨土として知られる様になり、後世觀音信仰より派生的に出た補陀落信仰として社會に普及する根源がここに見出せるのである。又觀音の誓願の場合、前の彌陀の脇侍としての觀音が、どこまでも彌陀に附隨されたものであり、彌陀の衆生濟度と云う聖業を助けると云う莫然としたものが、ここでは可成り具體的に述べられているのである。

三、法華系の場合、法華系の觀音については既に周知の如く、法華經普門品によるものであつて、之が最も詳細に述べられている。この觀音は勿論主尊としての觀音を説いているものであり、その誓願は華嚴經より以上に詳しく述べられている。後世この普門品を取り出して觀音經とした所以も觀音の性質等について詳細に述べられているからであ



らうと思われる。即ち普門品によれば、日常生活に於て衆生が諸苦惱を受ける時、一心に此の觀音菩薩の名を稱すれば、即時に其の音聲を觀じて解脱を得せしめるとあり、更に具體的に、觀音菩薩の名を稱持する者は七難を消滅し、觀音菩薩を念じて恭敬すれば三毒を除去し、此の菩薩を恭敬禮拜せば現世のみならず無量無邊の福德の利を得る事が出来る<sup>⑧</sup>と云い、その普門示現の救済を方便として三十三身十九說法を擧げて觀音の衆生救済を述べているのである。之は前二者に比較してみると、非常にその性質がはつきりしており、後世觀音信仰の中心を成したことは當然の事と云わねばならない。

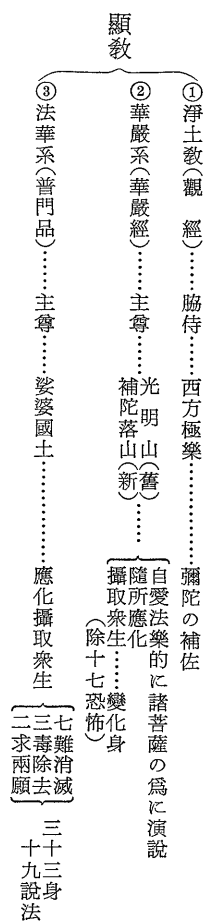
かくの如き顯教に於ける三系列は、それぞれ異なる經典であるが故に其の説明も異つてゐるわけである。

一は極樂補處の菩薩を説き、二は補陀落山（光明山）處演法の菩薩を明しており、三は隨願應化の菩薩を語つてゐるのでありそれぞれ特色を現わしている。之等三種の經典による觀音に對する信仰が、果して發展的に或は並行的に起つて來たかは斷定する事は出来ないが、恐らく初期に於ては起源を異にし、又自ら別個の流れを成して流布したものと推定されるのである。即ち觀無量壽經等に説く所によれば、菩薩は彌陀の一生補處の菩薩として西方の極樂世界に住し、無量劫の後で阿彌陀に佛次いで正覺を成ずと傳え、今現に阿彌陀佛を補けて衆生の教化に任じ、念佛の衆生の爲には阿彌陀佛と共に來迎するものであり、又法華經普門品の所説は、菩薩自身がこの娑婆國土に應現して機に臨み變に應じて諸々の衆生の苦惱諸難を拔濟せられるのであつて、換言すれば菩薩自身が三十三種の隨類應化の身を現じて衆生を救済すると云うのである。之は前説と比較してその住處が、救済の方便が、又その説明が大分異つてゐるのである。こうした信仰は中國に於ては六朝時代から既に普く行われて來たものである。

更に華嚴經の說に至つては、前の二説とは異つて菩薩は南方光明山の西方阿流泉浴地林木鬱茂の處に在つて、自愛法樂的に諸菩薩の爲に大慈悲經を演説していると云うのである。<sup>⑨</sup>勿論その中には隨所應化攝取衆生の説も加味されて

いる。この信仰は中唐以後行われた様である。

以上三系統の性格を見たが、之を圖示するならば次の様である。



こうした三系統の觀音に關する信仰の中で、最も普遍的であつた法華系の隨類應化の思想即ち三十三應化の信仰から更に諸大變化觀音の信仰を生むに至つたのであるが、それは密教の影響にもよるのである。しかしながらこうした密教の影響による種々の變化觀音の信仰の他に、密教で説く獨自の觀音を忘れてはならない。

即ち、密教に於ては顯教で個々に説かれている諸佛、諸菩薩、明王、諸天等を一つの大きな組織の中に組み入れて有機的な關係に置いたのが曼荼羅であり、曼荼羅は大日如來自身で、その大日如來の理の方が胎藏界曼荼羅、智の方が金剛界曼荼羅で、それぞれに觀音が存するわけである。

胎藏界曼荼羅では、中台院、觀音院、釋迦院、文殊院のそれぞれに觀音があり、中台院に於ては、大日如來を圍んで東の方から右廻りで寶幢如來、普賢菩薩、開敷華王如來、文殊菩薩、無量壽如來、觀音菩薩、天鼓雷音如來、彌勒菩薩が居られ、之によれば觀音は菩提門の悟りの徳である慈悲を代表し、果として阿彌陀佛に成ずる事が出来る事を示している。又觀音院(蓮華部院)では、部主たる觀自在菩薩を始めとして三十七尊を置き、その中二十一が諸觀音であり、その他はそれぞれの使者として畫かれているのである。又釋迦院と文殊院にある觀音は、釋迦如來の脇侍と

して、又文殊菩薩の後にあつてやはり脇侍として觀自在菩薩がそれぞれあるわけで、其他、遍智院に於ける七俱胝佛母（准胝觀音）、虛空藏院に於ける忿怒鉤觀自在菩薩、不空鉤觀自在菩薩、千手觀自在菩薩、蘇悉地院の十一面觀自在菩薩等の諸觀音が擧げられる。こうした觀音は全て大慈大悲を代表して表わされているものであり、その間に於ける性質、弘誓等には異なるものは無く、その像の表現の上にのみ相違しているのである。

更に金剛界曼荼羅に於ては、成身會の中に、西方阿彌陀佛の蓮華部に金剛法菩薩として觀音菩薩が如來の四位の親近菩薩の一位として示現し、又四印會に於ても觀音が見られる。

又こうした曼荼羅に關係なく説かれている觀音として「講觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪經」「十一面觀世音神呪經」「不空羂索呪經」があり、之等はそれぞれ誦呪の作法、彫造の法式、壇場の儀軌等が詳細に示されており、その中、「陀羅尼呪經」では、西方淨土から阿彌陀佛が觀音勢至を從え、その中觀音が種々の神呪陀羅尼を唱える事によつて惡疫を除き色々な災難を免れしむることを説き、<sup>②</sup>「十一面觀世音神呪經」が十一面神呪を唱える事により命終の時に無量壽國に生れる事が出來ると云い、又「羂索呪經」が觀音の住處を逋多羅山頂としている事等を見る時、顯教での無量壽經或は華嚴經に説く觀音と殆んど同一であることは興味ある問題である。

其他密教經典や儀軌等には色々な觀音が畫かれてはいるが、之等は一般的なものではなく、密教の修法の爲に用いるものであり一般的な流布は見えていないものである。

以上顯教の觀音、密教の觀音について考察したのであるが、顯教の經典によれば、觀音菩薩の性質、功德利益と云う事が十分に説き盡されており、密教經典に於ては特に禮懺儀軌造像作壇の法を説いているものであり、觀音崇拜の實際の方面を示しているものであると云い得よう。故に觀音に對する信仰は、顯教に説く觀音の信仰の中に密教が入り込み、それにより複雑多岐にわたりながらも、そこには一つの組織だつた關係が生れ、規定された觀音像も生まれ

るに至つたのである。しかしながら信仰の姿の上で果して顯教、密教の觀音と區別して信仰したものかどうかは疑問とせざるを得ない。恐らく顯教的な觀音であろうと、密教的な觀音であろうと無意識の中にそれ等を包括した形に於て觀音が信仰されたものであると思われるのである。しかしシナ唐時代以後密教の隆盛による觀音信仰が盛んになつたことを見れば、密教の影響大であると云わねばならない。

## 五

觀音のことがシナに知られたのは、三國時代に傳つた無量壽經に始まるのであるが、しかしそれが、極樂世界に於て阿彌陀佛と共に住し、阿彌陀佛が主であり觀音は従である事を説いているものであるから、當時その主である阿彌陀佛の信仰すらなかつたのであるから、その従たる觀音のみ獨りあるべき理由がないのは當然の事である。實際に觀音が信仰される様になるのは、やはり觀音の功德を説き、その信仰を鼓吹している法華經普門品翻譯以後と考えるのが至當であらう。

法華經はシナに於て三存三闕として三種現存しており、第一譯として三國吳の支彊梁接が五鳳三年七月(A.D. 二五六)に譯出した法華三昧經であると云われているが、この經が現存の法華經と同一であるか否かは、この經が現存しておらない爲に疑問とされている。現存している中の一つ、正法華經は西晋の太康七年(二八六)竺法護によつて譯出されたものであるが、天台智顗の「觀音義疏」に晋の謝敷の作つた「觀世音應驗傳」を引用して、

「其傳云、竺長舒晋元康年中於洛陽爲延火所及。草屋下風豈有。免理一心稱名風廻大轉隣舍而滅。鄉里淺見謂爲自爾、因風燥日擲火燒之。三擲三滅、卽叩頭懺謝。法力於魯那起精舍、於上谷乏得一東廡。於空野遇大力疲極小臥、此覺火勢已及、因舉聲禱觀。未得禱世音應聲火滅云云」

と晋の元康年間（二九一～二九九）に、洛陽の大火に際し、一心に觀音の御名を稱えて大難を免れたと云う事が説かれている。この元康年間は、竺法護が正法華經を傳譯した太康七年より僅か五、六年後の事であるから、恐らくこの正法華の光世音品によつて觀音信仰が世に行われる様になつたと思われる。又、高僧傳卷四には東晋升平五年の頃（A.D 三六一）

「干法開、不知何許人。事蘭公爲弟子。深思孤發獨見言表、善放光及法華」

と干法開が法華に通じていた事と思われ、又同時に竺潛が、大品般若等と一緒に法華を講じたと云われており、又竺法崇は法華一乘に長じて法華義疏四卷を作つたと高僧傳には傳えている。又竺法義の如きは、

「竺法義、未詳何許人、年十三過深公便問、……中略……深見其幼而顯悟、勸令出家。於是棲志法門、從深爲學、遊刃衆典、尤善法華、後辭深出京、復大開講席……中略……至晋興寧中、更還江左、憩于始寧之保山。受業弟子常有百餘。至咸安二年。忽感心氣疾病。常在念觀音。乃夢見一人破腸洗腹。覺便病愈。傳亮每云、吾先與義公遊處。每聞說觀音神異。莫不大小肅然」

と法華をよくし、而も病を得た時、觀音を念じて病をいやす事が出来たことを述べている。こうした法護の正法華經の傳譯以後、四世紀の後半にかけて、その經に通じ講經或はそれに説く觀音に疾病平癒を念ずる事が行われていたと考えられるのである。こうした中に約二、三十年後、姚秦弘始八年（東晋義熙二年・四〇六年）羅什三藏に依つて妙法蓮華經が傳譯されるに至つた。これにより觀音の現世利益が具體的に知られる様になり、その中の觀音普門品は觀音經として法華經から獨立して弘まる様になつた。その間の事情を天台智顗の「觀音玄義」には、

「夫觀音經部黨甚多、或請觀世音、觀音受記觀音三昧、觀音懺悔、大悲雄猛觀世音等不同、今所傳者卽是一千五百三十言法華之一品、而別傳者、乃是曇摩羅識法師亦號伊波勒菩薩、遊化葱嶺來至河西、阿西王沮渠蒙遜歸命正法、

兼有疾患以告法師、師云、觀世音與此土有緣、乃令誦念患苦即除、因是別傳一品流通部外也」<sup>②</sup>

と、悲華經を譯した北涼の曇無讖が、葱嶺を越えて河西に來た時、王の沮渠蒙遜の難病を見て、觀音菩薩は此の土に緣ありと云つて、普門品を念誦することをすすめ、爲めに病苦を除いたので此の時から觀音經が別行として流布する様になつたと述べている。こうした觀音經の別行流布は、それ自體觀音信仰の流布を物語るものであらう。又この時代インドに赴いた法顯三藏は、錫崙からの船の中で海風に惱まされた時、觀音を念じて難を逃れ無事歸朝したと傳えられ、又東晋末郭宣之（三一七―四一九）は觀音の圖像を安置し之を拜した事を傳えている事等は當時の人々に觀音信仰の熱を高めた事であらうと思われる。かくの如く羅什の法華經傳譯によつて、道融、僧叡、慧觀、曇影などが法華を研究し、北齊の慧文から南岳慧思を経て、隋代の天台智者大師に至り法華を以て一宗を樹立したのであるが、こうした法華隆盛と並行して觀音信仰も之等の人々を中心として社會に普及して行つたのである。之等の事は後に多くの靈驗記の製作を見、又「法苑珠林」、「高僧傳」等に數多くの靈驗譚を見出し得る事によつて窺われる所である。

こうした法華經の系統をひく觀音の信仰は既に正法華經傳譯以後行われて、續いて南北朝、隋、唐と一貫した系統をひいた信仰が續いて來たのであるが、他面華嚴經に説く觀音の信仰、或は觀經に説く觀音の信仰又密教による觀音の信仰はどの様であつたであらうか。勿論既に述べた事であるが、信仰の形の上で區別し得るものではないが一應シナでの起源を見たい。

その中華嚴系と密教系を取り上げてみると華嚴經の中國傳譯は、東晋の佛馱跋陀羅により義熙十四年より三年を費して宋永初元年（四二〇）に完成したものである。後至相大師智儼（六〇二―六六八）が「華嚴經搜玄記」五卷を著わし、又賢首大師法藏（六四三―七一）は「探玄記」二十卷を著わしている。こうした傳譯に續いてこの註疏が、その中に説くものが觀音を中心としたものではないにしても、華嚴經に説く觀音の補陀落淨土の思想が補陀落信仰の

基礎になつたに違いない。この觀音の補陀落淨土に就いては、隋の開皇七年（五八七）に闍那崛多が「不空羂索呪經」を傳譯し、この中に

「一時婆伽婆在迦多羅山頂觀世音宮殿所居之處」

と見えている所から、この頃から觀音の住所が補陀落山である事が知られる様になつたと考えられる。次いで周の則天武后、聖曆二年（六九九）實叉難陀に依つて華嚴經八十卷が譯出されている。觀音の住所が補陀落山である事を一般的に知られたのは勿論前記の「華嚴經」「不空羂索呪經」譯出以後の事であつたかと思われるが、しかし普遍性を持つに至つたのは唐の宣宗大中十二年（八五八）に日本僧慧鑄が五台山から得た觀音像を舟山群島の潮音洞に安置して觀音院を創建<sup>⑨</sup>して此所を補陀落山と呼び、觀音の聖地として實際に人々の信仰を集めるに至つたのである。以上から考えてみると華嚴系を引く觀音信仰は、補陀落信仰となつて中唐以後盛んに行われたものの様である。

其他觀經による觀音信仰はそれを取り立てて云う程の異つた信仰は持つておらなかつたと思われ、勿論觀經の傳譯以後、慧遠、曇鸞、導綽、善導とわたる淨土教の高潮した唐代に至つて全く彌陀信仰の發展流行をうながし、一般大衆をして念佛生活に入らしめたのであるが、觀經による觀音に對する信仰は、こうした彌陀信仰に附帶したものとして見るべきで、彌陀の脇侍としての觀音が獨立した信仰を持つたとは考えられない。従つてこの觀音の信仰は阿彌陀信仰の發展流行と共に何等かの形で信仰されていたと考えるより他はないと思うのである。

次に密教の場合を考えるに、中國に於ける密教の傳來は、東晉の佛馱跋陀羅が「華嚴經」を傳譯した一年前、竺難提によつて「請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼經」一卷が傳譯（四一九）されて以來、それに關する經典も次第に譯出され密呪の流行もあつたが、何れも純粹なものではなかつた。従つて純粹な組織的な密教が傳來されたのは、唐中期の頃善無畏（六三七～七三五）が弟子一行と共に「大日經」を譯出（開元十六年七二五）した頃からと考えられる。善

無畏、金剛智、一行、不空等が多く、譯出經典を世に表わし、又含光、惠果、慧琳等何れも密教弘布に力を注いだ結果、密教に説く儀軌を主とし密呪を持誦する事に依つて罪障を消滅出來ると云う考えが、佛教儀禮に變化をもたらし、建築、彫刻、繪畫等に密教的色彩が濃厚となつて來たのである。こうした色彩は觀音信仰の場合に於ても例外では無く、三十三應化身の觀音信仰が之等の影響により、儀軌により細分された十一面觀音、千手觀音、馬頭觀音、如意輪觀音、不空羼索觀音、准提觀音の信仰と複雑化され、又禮懺儀軌、造像作壇の法を説いて、觀音崇拜の實際的面を示すようになったのである。

以上シナに於ける觀音信仰の流布は、法華系が最も古く六朝時代から普く知られたと見るべきで、華嚴系は唐以後盛んに行われ、觀無量壽經系もその前後に、密教系もやはり唐以後その普及を見たのである。

## 六

以上經典の漢譯の時期がその經典の成立では無いにしても、又漢譯された順序が經典の成立順序でないにしても、この場合經典漢譯の時期が觀音の初出の時期と考える立場から、觀音信仰の起源及びその思想類型、並びに中國に於けるその信仰及び系統を述べたのであるが、こうしたことから我國初期に於ける觀音信仰を見る時、中國の法華系の系統を引いている事が首肯されるのである。その事は即ち、佛教傳來以後、聖德太子が佛教興隆に力を盡されていた頃中國では隋代で、その頃の佛教輸入は勿論南北朝の佛教が日本に傳えられているわけであり、南北朝には既に法華系により觀音信仰が行われていたこと、又この法華經の具體的な現世利益を説く觀音信仰が、我國傳來當初の現世を中心とした時代思潮とが一致していた事からも窺われるのである。

更に、太子が法華經義疏を作られ、又その講經等があり法華經研究が盛んに行われていた事實、又少し時代が下る



が天平時代に既に「法華經義疏」「法華玄義」「法華玄贊」「法華文句」「摩訶止觀」「法華遊意」「法華玄論」「法華經略」「法華義疏」等、光雲、智顗、吉藏等の諸學匠の法華經の講讀、註疏書が書寫され讀誦されているのを見て、又法華經から獨立した普門品が觀音經として書寫、讀誦されているのを見ても明らかである。

しかし正倉院文書の中には「不空羂索經」「千手千眼經」「十一面神呪心經」の名も見えて、又其等の陀羅尼等の讀誦も行われた様であるから、天平時代は幾分かこうした密教的なものの傳來もあつた事は否定出来ない。

結局我國初期の觀音信仰の源流は中國南北朝に行われた法華經による觀音信仰に求められると考えられるのである。

註① 代表的なものは「寧樂」十三號、「觀音全集」全十卷、最近では毎日新聞刊「佛教藝術」十、觀音特集がある。

② 佛教大學淨土學研究室刊、淨土學研究紀要第七號「我國初期觀音信仰の形成過程」、淨土宗教學院刊佛教論叢第五號「日本上代に於ける觀音信仰の形態」、佛教大學學報第三十一號「觀音三十三靈驗所の形成に關する一考察」等其他。

③④ 加藤咄堂著「觀音信仰史」參照。

⑤ 大正藏23、No. 1435. p. 9, b, c. 十誦律第二。

「是作呪比丘、先辨一羊、若得芭蕉樹、若不得殺前人者、當殺是羊若殺是樹、如是作者善、若不爾者還殺是比丘」

⑥ 大正藏51、No. 2085. p. 859. b.

⑦ // // No. 2087. p. 883. b.

⑧ // // // p. 887. c.

⑨ // // // p. 913. b.

⑩ // // // p. 915. b.

⑪ // // // p. 915. c.

⑫ 大正藏9、No. 262. p. 56. c. 妙法蓮華經卷二十五普門品。

「善男子、若有無量百千萬億衆生、受諸苦惱、聞是觀世音菩薩、一心稱名、觀世音菩薩即時觀其音聲、皆得解脫」

觀音信仰の形成並にその流傳に關する一考察

⑬ 大正藏 6、No. 278. p. 718. b. 華嚴經卷五十一。

⑭ 大正藏 19、No. 945. p. 129. a, b, c. 首楞嚴經第六。

「世尊、我復以此聞薰聞修金剛三昧無作妙力、與諸十方三世六道、一切衆生同悲仰故、令諸衆生於我身心。獲十四種無畏功德……(以下に十四種の無畏の功德を擧ぐ)」

⑮ 大正藏 12、No. 365.

「若有欲觀觀世音菩薩者當作是觀作是觀者不遇諸禍淨除業障除無數劫生死三罪如此菩薩但聞其名獲無量福何況諦觀」

⑯ 大正藏 20、No. 1050. p. 56. b. p. 57. c. 寶王經卷三。

⑰ 大正藏 3、No. 157. p. 185. c.

⑱ 大正藏 12、No. 365.

「說是時無量壽佛住宮中觀世音大勢至是二大士侍立左右」

⑲ 同

「觀世音菩薩及大勢至於一切處身同衆生但觀首相知是觀世音知是大勢至此二菩薩助阿彌陀佛普化一切」

⑳ 同

「其身身相衆好具足如佛無異唯頂上肉髻及無見頂相不及世尊」

㉑ 大正藏 9、No. 278. p. 718. 大方廣佛華嚴經卷五十一。

「見觀世音菩薩往山西阿處々皆有流泉浴地、林木鬱茂地草柔軟結跏趺坐金剛寶座、無量菩薩恭敬圍遶、而爲演說大慈悲經云云」

㉒ 大正藏 20、No. 1043. p. 34. c. p. 35. a.

㉓ 大正藏 20、No. 1070. p. 149. b.

㉔ 大正藏 24、No. 1728. p. 923. c.

この傳については昭和29年10月京大人文科學研究所發行の同研究所創立25週年記念論文集に、塚本善隆博士が「古逸書六朝觀世音應驗記の出現」と題して發表せられている。

- ②⑤ 大正藏 50、No. 2059. p. 50. a.  
 〃 〃 p. 347. c.  
 「至<sub>二</sub>年二十四<sub>一</sub>講<sub>二</sub>法華大品<sub>一</sub>、既蘊<sub>二</sub>深解<sub>一</sub>復能善<sub>レ</sub>說」  
 ②⑦ 〃 〃 p. 350. c.  
 「少入<sub>レ</sub>道以<sub>二</sub>戒節<sub>一</sub>見<sub>レ</sub>稱。加又敏而好<sub>レ</sub>學、篤<sub>二</sub>志經記<sub>一</sub>而尤長<sub>二</sub>法華一教……崇後卒<sub>二</sub>於山中<sub>一</sub>著<sub>二</sub>法華義疏四卷<sub>一</sub>云」  
 ②⑧ 大正藏 50、No. 2058. p. 350. c.  
 ②⑨ 大正藏 34、No. 1726. p. 891. c.  
 ③⑩ 大正藏 51、No. 2085. p. 865. c. p. 866. a. 法顯傳。  
 ③⑪ 法苑珠林第十七。  
 ③⑫ 日本佛教全書 101、元亨釋書第 16、釋慧萼傳。  
 普陀山誌によれば後五代の梁の貞明三年（916）（日本延喜 16 年）としてをり、大中十二年（858）から 58 年後の事となつてゐる。